

能動性の統治論的考察¹⁾

——「自己との関係」の現代的位相——

大河原 麻衣

堀内 進之介

本稿の眼目は、福祉国家体制後の現在、主観的世界に足場を置く政治が展開する中で、人々の能動性が何によって可能となっているのかを検討することで、改めて人々の能動性は何を可能にしているのかを問うことにある。

統治の現代的な状況を見遣れば、現在は、主観的世界の地平で美を糧とする政治が展開する時代にある。このような状況は、社会的世界の地平で、社会的公正を問題としてきた諸議論それ自体の抑圧性が自覚されるにつれ、徐々に生じてきたものであるといえる。そうした中、選択の自由が主体性の復権というイメージをもたらしており、心理学的なテクノロジーが、アジェンダ・セッティングパワーを免責しながら、選択肢自体の創造の可能性はむしろ、主体性からは切り離されている。本稿では、こうした指摘を通じて、意味ある政治的目標とは、既存の政治が何をしてくれるかと問うことではなく、既存の政治を試練にかけることにある、ということを示唆する。そしてとりわけ「克己する営み」を提起することで、その可能性のひとつを示すこととする。

こうした試みは、ミシェル・フーコーやニコラス・ローズの論じる「自己の自己自身への関係」の中に、あるいはヴェーバーが重視した「誠実さ」の議論に見出せるものであるが、本稿は現代社会におけるその意義を、改めて喚起することを隠れた狙いとしている。

キーワード：心理学知、統治性、克己

1 本稿の目的

本稿の眼目は、社会の再帰的性格が顕著になった福祉国家体制後の現在²⁾、つまり主観的世界の地平に立脚した政治が行われる中で、人々の能動性が何によって可能になっているのかを検討し、改めて人々の能動性は何を可能にしているのかを問うことにある。こうした試みは、「社会的公正」をめぐる問いは現在、不公正の是正に向けられているというよりは、むしろ人々の能動性を自己完結的なものへと切り詰めている、という数多の指摘を背景にしている。例えば、ニコラス・ローズは、政治が依拠し政治を糧とする理念を捉える歴史的な視座から統治の現代的な状況を見遣れば、選択の自由が主体性の復権というイメージをもたらしており、心理学的なテクノロジーが、アジェンダ・セッティングパワーを免責する役割を果たしながら、選択肢自体の創造の可能性を侵食している、と指摘している (Rose 1999)。本稿では、こうした指摘を踏まえて、意味ある政治的目標とは、既存の政治が何をしてくれるかと問うことではなく、既存の政治を試練にかけることにある、ということを示唆したいと考えている。そしてまた、こうした試みは自己の自己自身への関係として「誠実さ」³⁾の地平において希求されるべきものであり、その可能性を「克己する営み」を提起することで示してみたい。

ここであらかじめ断わっておきたいのだが、われわれは克己をモノローギッシュなものとも、目的論的なものとも考えてはいない。克己する営みの本質は、未来を志向するために過去を想起するという時間構造にある、と考えているからである。この点については、3.2節でヘーゲルとカントの対比において述べる。ここでは差し当たり、克己する営みとは、アゴニーシッシュなものとして考えられるべきである、ということだけを指摘しておきたい。したがって、「競合するそれぞれの自己同一性にかかわる知識——つまり、批判的に伝統を想起し、科学、哲学、芸術によって刺激を受け、討議的にかつ実験的に——を育てるような共同体」(Habermas 1976=2000: 138-9)の創造という理想

は諦められるべきではないだろう。とはいえ、現実としてこうした共同体が存在しない今、この営みを、かりそめにも行政的処置としての「教育」に委ねることはできない⁴⁾。かといって「社会化」を伝統に委ねておくことももはや可能ではない。アンソニー・ギデنزが言うように、善かれ悪しかれ、伝統もまたわれわれの選択肢のひとつに過ぎないものになっているからである(Giddens 1990=1993)。それゆえ、われわれは克己する営みをむしろ「実験的態度」として擁護してみたい⁵⁾。

2 倫理性の政治から精神性の政治へ

複雑な現代社会において、社会的公正を大上段に構えて論じることが難しい。ジョン・ロールズのリベラリズムが、多様化した世界観やライフ・スタイルを前に行き詰まりを見せていることが、それを端的に表している。確かにロールズは「正しい」ということの意味内容も多様化した状況において、社会が「公正」であるということは、個々人が自分の考える「よき生」を実現するためのアイデンティティを作り上げる自由を、誰にも等しく保証することにある、と主張している。「よき生」といえども、自分が属している文化のコンテクストから全く切り離されてあるわけではないからである。しかし、ロールズの主張するリベラリズムは、社会の構成員が、自己主張しあいお互いに拒否する権利を持つことを許容しうる点で、当該社会の文化のコンテクストを社会の構成員たちが納得し受容してくれることを期待する、という以上の内容を含んではいない(Rawls 1993; Habermas 2001=2004)。

社会的公正を複雑にした目下の社会状況は、アクセル・ホネットの「世界の意味地平を切り開く批判の可能性」といった社会的公正の前提に対する批判的実践を重要なものにした(山本・堀内 2008; Honneth 2000=2005)。ギデنزの「ライフ・ポリティクス」やアルベルト・メルッチの「新しい社会運動」、フェミニズムによる「差異の政治」などの議論も、目下の社会状況に対応したものであるといえよう(Giddens

1991=2005: Melucci 1989=1997). しかしながら、現在、これらの社会的公正の前提条件を問題視する諸議論、すなわち、倫理性の政治 (Ethico-politics) と呼ぶべき試みは、既に述べたように、ある部分では人々の能動性を自己完結的なものへと切り詰める、精神性の政治 (Etho-politics) に飲み込まれつつある。詳述は後段に譲るが、社会的公正への異議申し立ては、例えば労働においては、労働の人間化や自己実現などといった標語の下に、当事者の主観的な了解に充足が与えられることによって、異議申し立ての社会的意義自体が、主観的・経験的な充足によって脱臼されるという事態を招いている。

労働における自己実現の可能性は、経営者が付帯的な報酬（例えば、金銭的なものや社会的なもの）を労働対価として提供せねばならないという考えからの転換を意味する。それどころか、報酬は労働それ自体の中に見出されるようになる。経営者はそれゆえ、主に労働をできるだけ興味深くやりがいのあるものにし、またそれを個々の労働者にとって有意義なものになるようにお膳立てすることに関わっている。……以前にもまして、経営者は、従業員に労働を通じた自己達成を提供する賛助者となっているのである。(Ribeaux & Stephen 1978: 306)

以下では、このような状況の進展を、まず個人化という観点で捉え直し、さらに現代日本においていかに議論されてきたのかを論じ、それがいかなる帰結となりうるのかを示す。

2.1 個人化の2つの相貌

倫理性の政治——つまり、倫理に適っているか否かを問うのではなく、既存の倫理それ自体を問う政治は、後期近代社会という高度に再帰的な社会を背景にしている。ギデンズが提起したライフ・ポリティクスも、社会の高度な再帰性と、それによる個人化の進展に対抗すべく試みられたが、ギデンズ自身も認めているように、再帰性と個人化

の進展がライフ・ポリティクスの可能性の条件ともなっているのである (Giddens 1991=2005). いまやアクセルとブレーキが別々の機能を持つとは素朴には言えない, という点にわれわれは現代社会のメルクマールがあると考えている.

ウルリヒ・ベックによれば, 個人化とは, 社会の再帰性の高まりによって, 個人が社会的なものの再生産単位となるような状況である. 個人化は, 伝統的な社会の規範的な構造の中に埋め込まれていた個人を析出し, 人生を, 個人にとって単に与えられるものではなく選択可能なものにする. そしてさらに, 選択主体としての個人が, 自分のライフ・スタイルやアイデンティティを自ら見つけ出す必要に迫られることを意味してもいる (Beck 1986=1998). つまり, 個人化はそれまで自明であった物事を個別的な視点から内破し, 吟味させる契機をもつものである.

しかしながら個人化は, ギデンズやベックが示唆するように, 2つの相貌をもっている. 個人の能動性の展開 (自己決定) というポジティブな相貌と, いかなる選択であれそれによって生じた問題が個人に還元される (自己責任) というネガティブな相貌である. ここでは便宜的に, 前者を「主体化」, 後者を「私事化」と呼ぶとすれば, 私事化には更に2つの段階/側面があると思われる.

私事化の第1の段階/側面は, 社会的な次元に属するはずの問題を, 個人の選択の問題として個人に帰属させる「帰属処理」である. そして, 第2の段階/側面は, 帰属処理された問題の解決自体をも全面的に個人的な次元に帰責する「帰責処理」である. 例えば, フリーターは, 社会構造的な要因から生み出されているにも関わらず (玄田 2001), 自分の夢を追求するためにフリーターになることを選択したのだと言われ [帰属処理の段階/側面] (阿部 2007), 他方でフリーターから抜け出せない人に対してはよりいっそうの個人的な努力が求められる [帰責処理の段階/側面] という事例を考えることができる (若者自立・挑戦戦略会議 2003).

ネガティブな側面としての私事化に比せば, ポジティブな側面とし

での主体化が具体的にもたらしたのは、倫理性の政治、つまりライフ・スタイルやアイデンティティを選択可能なものとして開こうとする実践であった。こうした倫理性の政治の背景として、最大多数の最大幸福を暗に是とするような、社会的な風潮をあげることができよう。差異を重視したアイリス・ヤングや、フェミニズムの主張は、まさに個人主義と普遍主義を前提として社会的公正の問題を扱ってきたリベラリズムの諸議論に対する異議申し立てでもあった (Kenny 2004; Young 1990)。要するに、倫理性の政治の要諦は、「我々」の幸福が取り沙汰される中で、「我々とは誰か」と問うことで、「我々」からこぼれ落ちる当事者のパースペクティブを議論の俎上にあげることにあつたわけである。ナラティブセラピーやこれに基づく自己物語論は、こうした文脈の延長線上で、有効な方法論と見做され、積極的に意義づけられてきたのである。上述の整理に引き付ければ、倫理性の政治を可能にしたのは、個人化のポジティブな相貌としての、「主体化」であつたといふことができよう。

しかしながら、このような倫理性の政治の重要性が広く人口に膾炙するようになるにつれ——同時に、自明性の喪失自体が自明となり、流動性が高まるにつれ——新たな選択の可能性を模索するために既存の選択肢を問題化したはずの実践は、それが有する批判的検討の重要性が捨象され、「選択の自由」の問題として消費されるようになった。言い換えれば、「いかに選択するか」から「何を選択するか」の問題に力点がシフトしたのである。自明性が支配する一枚岩的な社会状況の中で模索された諸可能性は、可能な多くのライフ・スタイルの承認という形をとりながら、同時に批判的な検討の機会や動機を磨滅させたわけである。

この段階／側面は、批判的な検討よりも選択に力点が置かれるという点で帰属処理の段階ともいえるが、まだ個人に帰属処理された問題の解決にあたっては、社会に投げ返す契機を多少なりとも保持していたように思われる。しかし、流動性が一層高まると、多様な選択肢の中から選択をするための、選択指針すら多様化し、一種のアノミーに

陥ることになったと考えられる (Bauman 2005=2008; Sennett 2006=2008)。「もし仮に、選択肢としての情報の幅が自由の幅を意味しているのなら、情報の増大は自由を更に拡張していくことになり、我々は未曾有の自由を手にすることになるだろう。けれども、『多くの可能性の世界』は当然ながら、我々に与えられた細やかな処理能力と僅かな時間の閾値を凌駕するために、『多くの選択肢がある』という事実が未来からの圧力となって我々を苛むことになる。言い換えれば、未来を基点にして現在までを逆算するには情報はあまりにも多すぎ、現在を起点にして未来までを計画するには情報選択の指針はあまりにも多義すぎる」(堀内 2006: 8) のである。

倫理性の政治、あるいは差異の政治がフェミニズムの立場から多く推し進めてられてきたことから、日本におけるフェミニズムやその運動を概観することで、多少なりともこのような変化を具体的に見ることができるだろう。

1970年代に生じたウーマン・リブ運動は、まさに女性が女性であることを引き受けることから始まった運動といえることができる。

田中美津が

抑圧の、そのよってきたる由縁を明らかにしていくことはいくまでもなく大切だが、しかし、さらに問題なのは、それがわかったところで、あたしたちは、その作られた現在、作られた自分からしか出発しえないというそのことなのだ。(田中 1992: 67-8)

と述べたように、「とり乱し」を語ったリブ運動は、押し付けられた女性であることによって生じる課題を、自らの課題として引き受けるところから出発した。この段階は主体化と帰属処理の段階／側面であるといえることができる。リブ運動は、それまでの女性運動が母性を強調し優生思想に傾きがちであったのに対し、1980年代初頭の「優生保護法改正案」阻止をめぐる闘争にみられるように、母性だけに限らない女性の権利を主張していった。だが、帰責処理の段階／側面に至り、

自己決定と自己責任が不可分となるにつれ、離婚するのも未婚の母となるのも「特殊」なことではなくなり「自由」ではあるが、すべては個人がリスクヘッジすべき問題となっている。例えば、新自由主義のイデオロギーの元では、女性の経済的自立の重要性の訴えが、児童扶養手当の削減の口実とされてしまうのである。無論、こういった問題に対してもフェミニズムは異議を申し立ててきた。だが、1990年代に入り——1980年代から続く動きでもあるが——ポストモダン・フェミニズムやポストコロニアル・フェミニズムが注目を浴び、「女性」の中の差異が議論され始めたとき、「女とは誰か」というラディカルな問いは、選択肢自体の批判的検討の次元に問題を再度差し戻したかに思えたが、哲学論議に横滑りしたことで、実践的な問題からはむしろ遠く結果となった。これに伴い、現実面では、「女とは誰か」という問いも、個々人の選択の自由へ、そして自己責任へと収束しつつあるように思われる。

このようにして個人化は、ポジティブな相貌としての「主体化」よりも、ネガティブな相貌としての「私事化」に重心が傾いていく。個人化の重心の変化は、選択のアノミーに陥った人々を次第に精神性の政治へと駆り立てていくことになる。

自分らしく生きるために、自分らしさの根拠について検討・評価するための材料を、より広範な社会関係の中に探し求める実践としての自分探し、こう言ってよければ、倫理性の政治は、選択のアノミーによって、選択指針を求める非常に内省的な実践たる精神性の政治へと変容するのである。

選択指針とはかつてならば社会関係の中に見出されたはずのものであるが、選択指針の正統性が問われる（選択指針の帰属処理を求められる）中で、選択に先立って選択指針を自問自答せざるをえなくなる（選択指針の選択の帰責処理をせざるをえなくなる）。このような過程、つまり、選択のための選択指針の選択のための選択指針の選択……といった自家撞着的事態は、往々にして個人を社会関係から退却させる。選択のアノミーをひとつの帰結とする社会の過剰流動化は、自

己決定と自己責任を不可分なものとし、「主体化」と「私事化」の境界を曖昧なものとしてしまう。

ここにおいて、倫理性の政治 (Ethico-politics) は全面的に精神性の政治 (Etho-politics) へと転換される。本稿では、以上を踏まえ、精神性の政治とは、倫理性の政治とは異なり、アゴーニッシュな実践への動機づけというよりは、モノローギッシュな心的行為態度 (ethos) に働きかける政治である、と定義したい。このように定義することによって、当事者の主観的な自己了解を充足させることで、選択肢の創造可能性が選択の自由へと切り詰められ、そこでは選択のアノミーに陥った人々に対し、さらに心理学的なテクノロジーが機能する統治＝政治的傾向を、ある種の理念型として取り出すことができる。

ニコラス・ローズは、このような統治の現代的傾向を『〈魂〉の統治』 (governing the soul) として論じている。ローズの系譜学が描いたのは、感情や私的自己をも含む魂と呼ばれうるような自己について、当事者の望んだことと統治側の意図とが交差し、しかもそれが“psy”を冠する学知——いわゆる心理学知——を中継装置として結びつけた歴史的過程である。具体的には、さまざまな場面で、人々の自己実現要求と、個人の興味に対する自助努力を促す形で行われる統治側の方向付けとが、この中継装置、すなわち心理学知によって結びつけられる事態が論じられている (Rose 1999)。ローズが明らかにしようとしているのは、要するに、個人化の進展する中で、人々には確かに選択の自由は与えられているが、こうした契機から自由ではないということである。

2.2 心理主義化と心理学化

ローズの指摘する心理学知や心理学的なテクノロジーによる政治——精神性の政治は、日本でも心理学化、もしくは心理主義化といった言葉で盛んに議論されてきた。心理学化とは、心理学の用語を用いて、心理学的な視点から、「心」についての・「心」をめぐるコミュニケーションが盛んに行われる事態一般を指している。

ここで述べる議論の要点を先取りすれば、心理学化と呼ばれるものには、大別すれば、「個人的な実践としての心理主義化」と、「社会的な処方箋という側面を持つ心理学化」を挙げることができる。だが、こうした2側面は個人化の進展が伴う社会的な病理として、「ひとつの作用」・「ひとつの連鎖」として解釈できる。

例えば山田陽子は、心理学——特に現在興隆している臨床心理学——が、個人の内面＝心理に着目し、そこに生じるさまざまな問題を個人に即して解決しようと試みるものであることを考えれば、心理学化が個人化の帰結であるという議論までの距離は遠くないと論じている（山田 2007）。このように心理学化が個人化の帰結と関係づけられるに至った経緯はどのようなものであったのだろうか。ここではひとまず、心理学（心理主義）化についての、森真一による議論と、斎藤環による議論の整理を行うことで示してみたい。

森は、心理主義化という言葉によって、心理学的還元主義の進行を論じている。森によれば、数量化し、効率化をはかり、テクノロジーによるコントロールを推し進め、計算や予測可能性を高めていくような合理化の進行に伴って、人々は、心理学的知識や技法によって感情や日常生活までもを合理化し、社会の心理主義化をいっそう推し進めている（森 2000）。つまり、森は心理主義化⁶⁾を、合理化の進化形ないしは、合理化がもたらす非合理性のひとつのバージョンと理解しているわけである。森が注目するのは、心理学的知識や技法によって、より合理的に社会に適合するように自己に働きかけるその仕方（個人的な実践）であると言える。もっとも、こうした自己への働きかけをすべての点において否定的に語る必要はないだろう。社会から何が期待されているのかに始終せずに、自分にとって何が必要で何をなすべきかを自問する実践はむしろ重要でさえある。事実、ピア・カウンセリングやフェミニズム・カウンセリングなどは、心理主義化として片付ければよいというものではない。問題はむしろ、その過剰であり、そうした自問の答えを結果として社会的な要請へと導き・変換する（メカニズム）である。森は摂食障害を例に以下のように事態を描写して

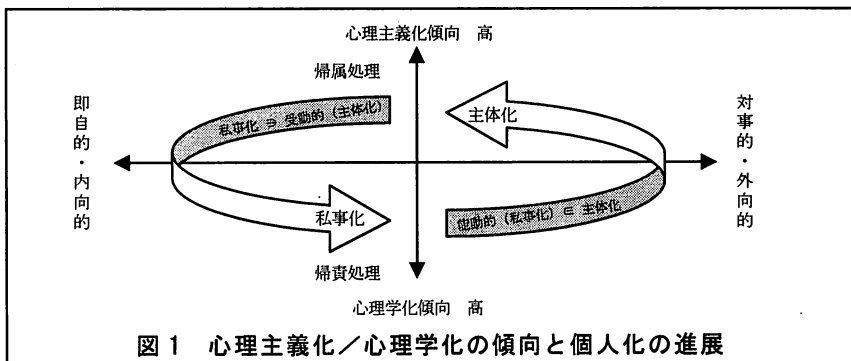
いる。

すべての女性にやせるよう努力させる社会的状況は「非人間的」な状況である。セラピストたちは、このような「非合理的」な状況の犠牲者たちを何とかして救おうと専門知識を産出し、治療にあたる。しかし、その職業的特性ゆえに、「個人の心理的特性」に人の関心を集中させる知識を産出する。それはマスメディア等をとおして、社会へと流布していく。その結果、皮肉にも、「非合理的な」状況を維持・再生産してしまう。つまり、ダイエットに無罪を言い渡し、「女性が美しくなりたいと願うのは当然のこと」という暗黙の前提を正当化するのである。（森 2000: 221）

他方、斎藤はメディアやサブカルチャーを概観した上で、心理学化を「精神分析という、自己言及的でない一回性の現象を解釈するための技術から、一般的知識のみを抜き出す」「そうした知識のフィルターを通して、他者を、あるいは自分自身を眺めてみること」（2003: 176-7）と定義している。心理学的知識が普及した結果、自分の精神疾患に自覚的になる人々が増え、精神疾患が全体として軽症化した一方で、自己スクリーニングとしても機能して軽症の病理が増加し、臨床心理学や精神医学の受容が底上げされる（斎藤 2003: 207）。森の議論と対比すれば、斎藤は心理学化を、森の指摘する自己に働きかける心理主義化（合理化）の非合理的な部分——自己への関心の過剰が引き起こす不安——を、個人に帰責する形で解消しようとする社会的な処方に見ているといえるだろう。

整理すると、森は「心理主義化」を、社会的な合理化が個人的な次元へと浸透したものとして捉えており、その作用として、個人を今以上に社会へと駆り立てる傾向を見出している。他方、斎藤は「心理主義化」の副作用を、心理主義化を引き起こすような社会的な〈メカニズム〉の批判的検討へと向かわせる契機とすることなしに、むしろ個

人的な問題として実際に処理し、またそのように処理するのが望ましいというような社会的な傾向を「心理学化」と呼んでいると理解することができよう。



こうした時間的な展開は、2.1 節で示した個人化（特に私事化）の展開を補完するものであると言えよう。つまり、心理主義化は帰属処理に、心理学化は帰責処理に相当する傾向として解釈することができる。図1は、心理主義化／心理学化の傾向と個人化の進展を単純化して表したものである。ここで敢えて、もう一度先に示した引用を記しておこう。というのも、この引用は、個人化が私事化にシフトし帰責処理の段階／側面を露にすると、心理学知やテクノロジーによるマッチポンプ的事態が生じる経緯を、何にもましてよく説明してくれると思われるからである。

労働における自己実現の可能性は、経営者が付帯的な報酬（例えば、金銭的なものや社会的なもの）を労働対価として提供せねばならないという考えからの転換を意味する。それどころか、報酬は労働それ自体の中に見出されるようになる。経営者はそれゆえ、主に労働をできるだけ興味深くやりがいのあるものにし、またそれを個々の労働者にとって有意味なものになるようにお膳立てすることに関わっている。……以前にもまして、経営者は、従業員に労働を通じた自己達成を提供する賛助者となっているのである。（Ribeaux & Stephen 1978: 306）

2.3 学問のセラボクラシー化

こうした精神性の政治の進展は、当然ながら当事者のパースペクティブの重要性を議論してきた諸研究にも大きな影響を与え、いくつかの問題をもたらしたように思われる。倫理性の政治——つまり、社会的な自明性に対して、当事者の視点を積極的に意義づけ、個人の選択を重要視する「主体化」に立脚する実践は、一方では自明視されてきた前提を問題化する契機を与え、他方では社会の要請にただ単に適合するというよりも、社会的な自明性から距離をとり自分が今何をなすべきかを自問する営みの重要性を社会に示すものであった。しかしながら既に述べたように、倫理性の政治は、このような実践の展開と相まって社会の流動性が高まると、逆説的にも、社会への適合をよりよく図る実践としても機能するに至る。つまるところ、心理主義化とは、社会的な要請として「主体化の実践」が与えられる事態を指している。こうした事態を、例えば熊沢誠などの労働社会学者は「強制された自発性」として指摘したが（熊沢 1997）、私見によれば、全体として当事者主義の立場を採る研究者は、こうした他領域の研究者の指摘を十分に汲み取ることも、また社会状況の変化に即して、自ら当事者主義を批判的に検討することも少なかったように思われる。

精神性の政治の進展は、当事者主義の立場を採る社会的諸実践を、その意図や目指すところとは別に、当事者の主観的な自己了解を慰撫するものとして、統治におけるある種のガス抜き装置に転換したものとして位置付けることができるだろう。精神性の政治をこのように捉えることができるとすれば、公共的なものと私的なものとを統合する方策は存在しないとして、「ニーチェ、サルトル、フーコー的な企てを、残酷さを避けること以上に重要な社会的目標があるなどと考えてしまう政治的態度に転化することがないよう、私事化せよ〔強調点原文ママ〕」（Rorty 1989=2000: 136）と述べるリチャード・ローティのような立場も、間接的ではあるものの、精神性の政治と解釈することもできるだろう（Rorty 1989=2000）。なぜならこれは、倫理性の政治を危険なものとして、むしろ脱政治化することを求めているからで

ある。そうであれば、人々は私事化することによって、そこで慰撫されガス抜きすることを積極的に推奨されることになる。このような選択肢の創造可能性を危険視する諸思想は、能動性を、選択の自由に縮減する点で、選択性の島宇宙化と呼びうるものである（宮台 1994）。

しかし、いまや問題は、精神諸科学における自己だけでなく、生物医学における自己の問題、生命そのものにすら進展している。生命力は資本となり、商品化され、多様な人間生命の価値を検討するという政治が実際に生じている（Rose 2007）。

常に既にわれわれは、自分自身を“psy”を冠する学知によって語るのみならず、“bio”を冠する学知によっても語ってきた。諸々の選択の責任が個人に帰結される現代社会において、われわれはカウンセリングを受け自己分析を行い、エクササイズやダイエットに励み、インフォームド・コンセントを受け、ドナーカードに記入し、不妊治療や出生前診断に悩む中で、直接もしくはメディアを通じて、精神や身体、生命の専門家たちからある種の価値に根差した諸原則を受け取ることになっている。現代の統治は、精神性の政治によって——私たちを適切に導こうとする新しい権威を介して、自己実現や健康増進といった個人主義的な諸価値に働きかけることによって、なされているのである。

当事者にとって、このような状況のどこに問題があるといえるのだろうか。強制と同意の境界は不鮮明であり、われわれは一方的に導かれるのではなく、導き導かれようと努力しあうダイナミズムの中に生きている。問題や不全感を抱える者もいるだろうが、心理学的なテクノロジーやバイオテクノロジーが適切に機能することで対処されうるならば、当事者の自己了解に共感的であろうとする社会的諸実践、もしくは私事化によって選択性を島宇宙化しようとする思想は、その適切な機能を支える以外に道はないのではあるまいか。

以下では、社会構築主義と倫理性の政治の内的な関係を論じ、構築主義がこれまで果たしてきた重要な役割が、精神性の政治の進展ゆえに、どのような問題を抱えることになったかを検討する。そして、ひ

とつのありうべき方向性として、「克己する営み」という自己の統治のあり方を提起することにしよう。

3 構築性から能動性へ

3.1 社会構築主義の陥穽

社会構築主義は、脱構築がそのメルクマールになるほどに差異の政治を推し進め、〈本質〉の措定によってもたらされた抑圧から、人々を解放する役目を担ってきた。その典型として、男女というカテゴリーと格闘してきたジェンダー論や、アイデンティティに関する問題を社会学の俎上に載せた自己物語論をあげることができるだろう。これらの議論はある種の権力——境界を定め、個々人にアイデンティファイを迫る構築権力とでも呼ぶべきもの——に異議を申し立ててきた。措定された本質が、単に人々を抑圧するだけでなく、当事者にとってもまさに本質的なものと感じられるがゆえに、根深い抑圧をもたらしていると主張してきたのである。こうした異議申し立てには、その出発点においてすでに、異議申し立て自体の権力性や政治性に対するジレンマが意識されていた。

確かに、本質的であると思われていたものの恣意性を指摘する議論が意義をもった時代はあった。すなわち、真理と政治が交差する地点に〈本質〉が措定され、〈本質〉の回復を図るものとされた政治的行為に対して、政治的行為に正統性を付与する〈本質〉の措定こそが暴力的である、と指摘する意義はあった。しかしながら、自明性の喪失自体が自明になった現在、社会構築主義的な立場は、異議申し立ての機能においては、その役目を終えつつある。社会構築主義という立場そのものが当初から抱え込んでいる権力性や政治性は、いよいよ無視できないものとなっているからである。以下で指摘するように、社会構築主義的な立場は今では、精神性の政治という意図せざる帰結をもたらしてもいるのである。それゆえ、われわれは、社会構築主義の立場に拘泥すること、あるいはこの立場を守株しようと試みることは、も

はや不毛であると考えている。今問題とされるべきはむしろ、美学と政治が交差する地点に〈実存〉が浮上するこの時代の、そのあり様に他ならない。

社会構築主義を掲げる議論の多くは、既存の自己や主体は、何にせよ統治側の最終目的に役立つ手段として扱われるものであって、それ自体では価値がないと主張している。この主張を全面的に認めるならば、われわれは他者からの認知と自尊心との間で進退に窮することになるだろう。というのも、原理的には、この種の主張においては、他者に受け入れられることに甘んじるのは、現在の自分自身を受け入れることでもあるからである。にもかかわらず、自己や主体の社会的な構築性を問題視し続けるこれらの議論は、他者との感応性において「人間はみずからつくるところのもの以外の何ものでもない」というサルトル的な実存主義と親和的であるか、さもなければ、社会的な構築性をあまりに強固で摩擦係数の高いものと見積るあまり、社会的な構築性を問題視する視座自体をも、いかなる意味においても規範的な文脈の下に正統化することができないでいる。

要するに、前者は、〈実存〉が有する政治性への自覚に乏しく、後者は、〈本質〉が有する政治性への自覚のゆえに、戦略的本質主義を退けることも、かといって支持することもできないのである。こうしてみると、自己物語論は前者の陥穽に落ち込み、ある種のジェンダー論は後者の陥穽に落ち込んでいるということもできる。自己物語論については3.2節で詳述する。ジェンダー論についての詳述は、稿を改めることにするが、ジェンダー論を大別すると、当事者の主観的な自己了解に定位する議論と、社会的公正に定位する議論とが見られ、どちらの議論も、他方の議論が提起する問題をうまく汲み取れない、というジレンマを抱えていることだけは、ここで指摘しておこう。

ところで、主体の構築性はこれまでも繰り返し議論されてきているのであるから、ニコラス・ローズ (Rose 1999) が指摘しているように、議論は次のステップへと移されるべきである。すなわち、人間の能動性を可能にしているものは、何でありうるかという問いである。

山之内靖は同じ観点から、次のように述べている。

われわれが問題にしなければならないのは、組織化され、システム化された社会状況の中で人間が主体性・能動性を失ってしまうという、かなりクラシックな論点なのではなく、組織化され、システム化された集団の中で、人びとがいかなる目標、いかなる価値規範を軸として主体的・能動的に活動しているか、ということなのである。……問われるべきは、現代社会において人間は主体的でありうるか否かではなく、いかなる動機を基準として行為しているか、ということである。(山之内 1982: 11)

議論を次のステップへと移せば、「最終目的に役立つ手段として扱われる自己や主体」は、支配 - 権力批判という視座からではなく、「権力がどう機能するかは、権力に対して応答する自己との関係がどのようなはずか」という視座から、〈実存〉や〈本質〉への居直りとしてではなく、むしろ権力の肯定的な次元において、すなわち、自己の統治という観点から再び見出すことも可能となるはずである。言い換えれば、われわれは既に恣意性の指摘から、次の一步をどのように踏み出すべきなのか、あるいは次の一步とは何か、という問題に立ち向かわなければならない地点にあるといえる。

3.2 エンクラティア

この問題に対して、われわれは「克己する営み」⁷⁾という往年の生活様式のスタイルを改めて提起してみたい。克己は、「人が他者に対して行使する権力において、自分自身にむけて行使する一つの権力である〔強調点原文ママ〕」(Deleuze 1986=2007: 185)。克己はまさしくひとつの権力である。克己する営みにおいて重要なのは、あくまで他者との関係において自分自身と対自することであり、他者との関係において自己を表出することでもなければ、承認をめぐる直接的な闘争でもない。克己するとは、こう言ってよければ、ヘーゲルにおける自

己疎外に近い概念である。しかし、歴史の必然的な法則性を前提にするのではなく、権力の諸関係の偶然的な不可測性に足場が置かれていることは重要な差異である。その意味では、克己とはカントにおける理性の公的な使用と通底するところがある。カントは次のように述べている。

自分で考えることは、真理の最上の試金石を自分自身の中に（つまり自分自身の理性の中に）求めることである。そして常に自分で考えるという格率が啓蒙である。ところで人が啓蒙を知識のうえでの啓蒙だと思い込んでいるかぎり、そのようなものは啓蒙には含まれない。なぜなら啓蒙とはむしろ、認識能力の使用においては否定的な原則であり、知識に非常に恵まれている人ほど、時として知識の使用においてまったく啓蒙されていないからである。自分自身の理性を用いるということが意味している当のことは、人がどんなことを想定しようとも、想定する際の根拠とか想定から帰結する規則が、自分の理性使用の普遍的原则として十分に可能だと自分でわかっているかどうかを自分自身に問うということである。誰しもがこのような吟味を自分自身に試みることができる。彼がたとえ迷信や狂信を客観的根拠によって論駁するほどの知識をもちあわせていないとしても、このような吟味をすればただちに、それらが消えうせるのがわかるであろう。というのも彼は、理性の自己維持という格率だけを使用するからである〔強調点原文ママ〕。（Kant 1786=2002: 87）

カントに従って克己を「常に自分で考える」ことの内に見出すならば、克己する営みは、「汝の欲するところのものと成れ」ということを意味するのでも、「統治からの離脱」を意味するのでもありえない。克己する営みにおいて、無闇に「汝の欲するところのものと成れ」という側面を強調することは、現代においては「人々は自ら成るように方向づけられている」という反省的な視座を欠くことにつながり、自ら

成ることを人々に要求する統治の主体と軌を一にってしまうことになるだろう。これでは権力の肯定的な次元を取り上げるところか、支配の関係を強化するだけである。しかるに、自己や主体の社会的権力による構築性を批判する議論の多くは、こうした反省的視座を等閑にしがちである。われわれの問題関心からすれば、政治性や権力性に批判的であるとは、それらから自由であることを決して意味しないばかりか、政治的行為や権力行使をある仕方において要請するものでさえあるといえる。批判は、その都度の権力の行使において実践されるべきものである。

「統治からの離脱」への欲求は、往々にしてある種の特別な他者との純粋な関係を権力から切り離されたものとして捉え、その関係において自己を表出し承認されることに価値を見出しがちである。確かにギデنزとは、再帰的近代において、人々の関係が「純粋な関係性」となっていると論じている (Giddens 1992=1995)。しかしながら、ギデنزが述べる「純粋な関係性」とは、伝統的な役割関係などから解放された無垢な関係性という意味ではなく、純粋に「権力の諸関係」となったという意味である、ということは指摘して余りある。すなわち、「固定された権力関係 (= 支配の諸状態)」が、「自由と自由の間の戦略的ゲーム」へと開かれた状態を「純粋な関係性」と呼んでいるのであって、権力と無縁なものでは決してないのである (堀内 2008a)。他者との関係に無垢な関係性を見出し、それによって統治からの離脱を可能と考える議論は、権力から逃れうるという「理想」によって、権力における抵抗の足場を自ら切り崩してしまっている。

3.1 節で触れたとおり、「自己物語論」はいまや良くも悪くも典型的な事例となっている。この議論は、自己を構築されたものと見做しつつ、物語ることによる自己変容の可能性に着目するものである。元来、自己物語論は、その出自からして、心理療法などの公的な場における権力性には非常に自覚的である。自己物語論の源流のひとつであるナラティブセラピー自体が、セラピーの場で語られるすべては物語であり政治的实践であるという前提に立ち、構築された物語を真理とせず、

議論の余地を残すということからも、それは容易に理解できる（野口 2005）。にもかかわらず、あるいはそれゆえに却って、いまやセラピーの場に限らず、自己物語をありのまま受け入れてくれる「親密な他者」の存在を重視する方向へと大きく傾斜しつつある（鈴木 2007）。また、語り手の体験の独自性やかけがえのなさを強調するために、ナラティブ・アプローチを採用し、ドミナント・ストーリーに回収されない語りを聞き取ろうとする共感的なフィールドワーカーの姿それ自体としても見ることができるだろう（渥美 2004）。調査者の中には、調査者自身がその自己物語の承認者として積極的に振る舞う者すらある（中村 2005）。

親密な他者との関係は、いまや明らかに、統治——構築権力——から離脱しうる無垢な関係性と捉えられている。無論、成りたい自己を物語る当事者のパースペクティブからすれば、「理想的な自己像」をありのまま受け入れてくれる他者は、重要な他者に違いない。しかしながら、こうした親密な他者の重要性は、承認関係の主観的了解に根差すものであることを否めない。成りたい自己を物語る当事者のパースペクティブから見出される親密な他者の重要性は、統治からの離脱を何ら保証するものではない。それどころか、「理想的な自己像」を受け入れる他者の存在が、自己物語の可能性の条件であるならば、成りたい自己を物語る当事者は、それを受け入れる他者の客体になることによって初めて、既存の自己を越え出ることになる。言うまでもなく、こうした関係は構築的な権力関係（統治）以外の何ものでもない。つまるところ、成りたい自己をありのまま受け入れてくれる「親密な他者」との関係性の強調は、当事者の意義に即したものでありながらも、同時に、その当事者の意義に即すこと自体が、精神性の政治の一翼を担うという可能性をまったく等閑視している。もっとも、自己物語論者はこうした機能を承知で引き受けているかもしれない。もしそうならば、自己物語論者は、統治論的社会設計の紛れもない推進者であるということになるだろう。

繰り返すが、2.3節で述べたように、当事者の自己了解に共感的で

あろうとする社会的諸実践，私事化によって選択性を島宇宙化しようとするような思想は，一見社会的な問題に定位しているようにみえて，その実，精神性の政治を補完してもいるのである．人々の人格に基づく平等な相互承認の関係は，尊厳ともいうべき人間の不可侵性を生み出さうるものである．であればこそ，主観的世界に定位した精神性の政治が進展する中で，そのような関係を統治のガス抜き装置とさせないための配慮は不可欠なものである．われわれは，かかる配慮を考えるためにこそ，自分自身の能動性を可能にしている諸価値と対峙し，内破する営みは改めて喚起される必要があると考えている．克己する営みの提起によって，われわれが企図するは，こう言ってよければ，倫理性の政治の再活性化なのである⁸⁾．

4 結び

現代社会においては，個人化の進展によって倫理性の政治と精神性の政治が生じており，良かれ悪しかれ主観的世界の地平の問題が焦点となっている．そうした中，倫理性の政治は，今では精神性の政治に飲み込まれている．人々の実生活から思想に至るまで，幅広く精神性の政治——主観的な了解を慰撫する社会問題の統治論的解消——が進展している．本稿は，それゆえに，これまで重要な役割を果たしてきた社会構築主義の立場が行き詰まりをみせていることを指摘し，主体の構築性を踏まえてなお人々の能動性が何を可能にするのかを倫理性の政治を再考しつつ，実験的態度としての克己する営みに見出すと論じた．

本稿は，したがって，こう言ってよければ，ひとつの美学，ひとつの哲学，ひとつの思想，ひとつの価値自由であり，「よき生」についての問題提起である．これは多くの部分でこれまでの「よき生」についてのポスト形而上学的な，そして社会学的な問題設定を越え出ている．というのも，本稿における「誠実さ」という心的行為態度に関わる問題提起は，社会学においては，倫理学に属す「個人的」で「私的」な

課題に過ぎないものとされるか、「教育」や「社会化」の範疇で、規範の内面化として間接的にのみ扱われてきたからである。しかしながら、受動的信頼を能動的信頼へと転換する諸実践（Giddens 1994=2002: 122-8）を支える〈動機〉が、真理や公正といった普遍妥当的とされた理念によっては必ずしも供給されなくなった現在ではむしろ、こうした問題設定は、社会的諸実践にとって最も重要なもののひとつであると思われる。「動機づけ」は社会科学における根本問題であり、今や直接的な課題となったと言っても過言ではないからである。

われわれは、自己の統治の現代的状況を踏まえてなお、選択肢の創造を可能にするという意味で、各人の能動性を高め、それを引き出す社会的な条件を、当事者のパースペクティブから問い直す契機が必要であると考えている。そのためにも、当事者の置かれている社会的な状況を勘案することによって、逆説的ながら当事者の自己了解を相対化する必要があると考えている。そもそも、社会的諸実践における当事者主義という立場の意義は、個人をより広範な社会関係に開くことにあり、個人の自己了解的な世界の主観的な充足を目指すことではなかったはずだからである。

個人をより広範な社会関係に開く必要があるとして現状を批判するとき、このような倫理的な要請を行うわれわれの立場もまた、現代の統治形態である精神性の政治と同列のものとして、同様の批判に晒されることになるに違いない。この批判に対しわれわれはそれを受け入れる準備がある。われわれの立場もひとつの権力の行使であり、政治であるからである。繰り返しになるが、人々の関係が純粹に「権力の諸関係」となった現代社会において、社会学も含め、すべての社会的諸実践は権力の行使をどのみち引き受けざるをえない。だからこそ、われわれは、克己する営み——自らに対して行使される権力において、自分自身に向けて権力を行使すること——を人々に、そして自分自身に喚起する必要があると考える。とりわけ、社会政策に対して、直接的にであれ間接的にであれ、影響を与える政治家や学者という立場にある人間は、自らの行使する権力に対して「誠実さ」が要請されて然

るべきであろう。それは自らの価値的態度を明示する価値自由であり、自らの価値的態度、自らの政治性を常に試練にかけるという倫理の要請である。まさしく、これはヴェーバーのいうところの責任倫理を引き受けることなのである (Weber 1919=1980)。

本稿で、以上のようにわれわれが提起した倫理的な要請に対し、どのような実践が対応するものとして指示されるのか、どのように生きればよいのか、と問われるかもしれない。しかしながら、本稿はそれを具体的に指し示すことができるとする信念をこそ、まさに標的とし、異化しようと試みているのである。したがって、われわれは次のように述べることで、その問いに応じたい。

すなわち、克己する営み——こう言ってよければ「よき生」——は、それが営まれる際に、営まれる中で、営まれることを通じてのみ存在する、と。

こうした観点からすれば、「よき生」それ自体を、その営みに先行するものとしても、営みの結果としても、あるいはまた、そのような結果とは関係ないものとしても考えることはできなくなるであろう。「よき生」は、条件設定として現実を単に制限するものではなく、むしろ現実に対して、ありうる限り最大限の現実を与えるような効果をもたらすものとして、考えられるべきである。つまり、「よき生」とは、「よき生」がまさしくそのような効果を発揮しつつある中で営まれるものとして考えるべきものである⁹⁾。「よき生」は、われわれの生活の外部に指針としてあるのではない。「よき生」は、営む主体を産み出すだけでなく、そのような主体を産み出しつつ自らをも産み出していくものである。克己する営みとしての「よき生」は、積極的に現実を生成するのみならず、現実を与える力をその都度異化する批判的な営みであるということこそ、「よき生」は語りえぬものとしてわれわれと共にあるものとなるのである。

以上を要するに、問題の水準はもはや恣意性ではなく、価値自由にあるのは明らかである。そしてまた、すべての自己のあり様が——本質であろうと構築されたものであらうと——恣意的である現状におい

て、倫理性の政治の再活性化こそが、選択肢を選ぶ自由から、選択肢を作り出す自由への可能性を切り開く手がかりとなろうこともまた、明らかであるに違いない。

〔注〕

- 1) 本稿では、「統治論的考察」を、1978年のフーコーのフランス哲学協会での発表「批判とは何か」の中で述べられた、絶えざる問い掛けを意味するものとして用いる。すなわち、「統治の技術のパートナーであると同時に敵でもあるものとして、この統治の技術を警戒し、これを拒否し、これを制限し、その適切な大きさを決定し、これを変革し、この統治の技術の適用を免れる方法」(Foucault 1990=2008: 76-7)を模索する思考という意味において用いる。この思考は、統治されないためにはいかにすべきか、という問いに与するというよりは、統治する権利の限度とはどのようなものなのかと問い直すことに与する。この観点からすれば、「強制された自発性」(熊沢 1997)という論議には賛同することはできない。本稿は、本質的にはむしろ「強制がない／ある」とはいかなることか、を問う次元に定位し、統治のあり様の歴史的位相を記述する山本および堀内による議論(山本・堀内 2008)を前提として、専ら今日的な統治のあり様を説明するものである。
- 2) 本稿における現在、「複雑な現代社会」などの言葉を使用する際に前提としている現在とは、「政治的秩序の正統性が反省的(再帰的)正当化の水準にまで上り詰めた時代」を意味する。これは、「第一に、政治的秩序の正統性(legitimacy)を請求してきた数多の先行研究は、究極的には社会の同一性を措定するにあたり、基本的な諸価値に説得性をもたせる正統化の試みであったということ。第二に、とりわけルソーやカントの登場以降、かかる正統化の試みは万象学や神学の物語的根拠づけに代わり、実践的な問題として論証に基づく正当性(validity)を希求してきたということ。第三に、いまや論証に基づく正当性も、その形式的諸条

件が問われるに従って、正当化という政治的な闘争に過ぎないことが広く認知されるようになったということを含意」（堀内 2008b）している。

- 3) ここでの「誠実さ」とは、ヴェーバーが学問を天職とする者に求めた誠実さ（Weber 1919=1980）、つまり「自己の論拠に対する明晰な自覚と、したがってまた『みずからの行為の究極の意味に関するはっきりとした責任の意識』（Peukert 1989=1994: 26）に他ならない。
- 4) 目的プログラムにおいて克己を考えることは、そもそも克己の概念と矛盾する。克己は「達成」に関わるというよりは、「越境」に関わるものだからである。
- 5) ここにいう「実験的態度」とは、プラグマティズムに見出される「条件プログラム」とも異なるものである。状況に依存するというよりは、状況をいかに解釈するかという心的行為態度に重点を置くものだからである。
- 6) 森の議論では、リッツァーによって拡大解釈されたヴェーバーの合理化テーゼが踏まえられている（森 2000）。
- 7) 本稿における克己とは、エンクラティアの訳語であり、「エンクラティア〔克己〕は、ソフロシューネ〔節制〕の条件であり、個人が節制をわきまえる（sōphrōn）人となるために自分自身にたいして行うべき働きかけや抑制の形式である。……エンクラティア〔克己〕という言葉は概して、自己による自己の支配の力動性とか、この支配の求める努力とかを支持する」（Foucault 1984=1986: 81）ものである。
- 8) たとえば、ナラティヴセラピーの一潮流であるリフレクティング・プロセスを研究し実践する矢原隆行は以下のように述べる。
「筆者の専門領域である社会学の一部においては（福祉学や心理学の一部においてもまた）、近年、『社会の臨床心理学化』などと呼ばれる状況に対する批判的考察がいくつか見受けられる。……筆者自身、そうした問題意識にはある程度共感しつつも、そうし

た状況への批判（場合によっては、その批判の批判といった背後取りゲーム）を徒に重ねながら、個々の対象領域での実践における具体的代案を提示することのない社会学の議論には疑問を感じていた」（矢原・田代編 2008: ii-iii）。このように、近年、実践に役立つことを標榜する臨床社会学という立場が広まりつつあるが、「実践に役立つ」ことが果たす機能についての自覚や配慮がどれほどのものであるのか、われわれは不安を覚えざるをえない。社会学の批判的視座を「空虚」なものに見做す前に、批判それ自体を実践として捉える必要があると考える（堀内 2008b）。

9) この段落は、Macheray(1992: 186-7)の本歌取りである。

〔文献〕

- 阿部真大, 2007, 『働きすぎる若者たち——「自分探し」の果てに』日本放送出版協会。
- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房。
- 渥美公秀, 2004, 「語りのグループ・ダイナミックス——語るに語り得ない体験から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第30巻, 159-73。
- Bauman, Zygmunt, 2005, *Liquid Life*, Cambridge: Polity Press. (=2008, 長谷川啓介訳『リキッド・ライフ——現代における生の諸相』大月書店。
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。)
- Deleuze, Gilles, 1986, *Foucault*, Paris: Les Editions de Minuit. (=2007, 宇野邦一訳『フーコー』河出文庫。)
- Foucault, Michel, 1984, *L'usage des plaisirs: Volume 2 de Histoire de la Sexualité*, Paris: Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『快楽の活用——性の歴史Ⅱ』新潮社。)
- , 1990, "Qu'est ce que la critique? Critique et Aufklärung," *Mbulletin de la société française de philosophie*, 84(2). (=2008, 中山元訳「批判とは何か——批判と啓蒙」『わたしは花火師です——フーコーは語

る』筑摩書房.)

Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford: Stanford University Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房.)

——, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford: Stanford University Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)

——, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford: Stanford University Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)

——, 1994, *Beyond Left and Right*, Cambridge: Polity Press. (=2002, 松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて——ラディカルな政治の未来像』而立書房.)

玄田有史, 2001, 『仕事のなかの曖昧な不安——揺れる若年の現在』中央公論新社.

Habermas, Jürgen, 1976, *Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=2000, 清水多吉監訳『史的唯物論の再構成』法政大学出版局.)

——, 2001, *Die Zukunft der Menschen Nature: Auf dem Weg zu einer liberalen Eugenik?*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=2004, 三島憲一訳『人間の将来とバイオエシックス』法政大学出版局.)

Honneth, Axel, 2000, *Das Andere der Gerechtigkeit*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=2005, 加藤泰史・日暮雅夫他訳『正義の他者——実践哲学論集』法政大学出版局.)

堀内進之介, 2006, 「配慮なき世界への配慮——思想としての批判的社会理論に寄せて」『Mobile Society Review 未来心理』16, モバイル社会研究所, 6-15.

——, 2007, 「『生活世界』のコミュニケーション論的転回」『社会学

- 論考』28 東京都立大学社会学研究会。
- , 2008a, 「第 13 章 国家から社会へ——フーコーとギデンズ」『ブリッジブック社会学』信山社, 10 月出版予定。
- , 2008b, 「再帰的近代における「社会批判」とはいかなるものか」『社会学論考』29 首都大学東京・都立大学社会学研究会, 投稿中。
- 自立・挑戦戦略会議, 2003, 『若者自立・挑戦プランの具体化』経済産業省。
- Kant, Immanuel, 1786, *Was heisst: sich im Denken orientieren?*. (=2002, 円谷裕二訳「思考の方向を定めるとはどういうことか」『カント全集 13 批判期論集』岩波書店。)
- Kenny, Michael, 2004, *The Politics of Identity: Liberal Political Theory and the Dilemmas of Difference*, Cambridge: Polity Press. (=2005, 藤原孝・山田竜作・松島雪江・青山円美・佐藤高尚訳『アイデンティティの政治学』日本経済評論社。)
- 熊沢誠, 1997, 『能力主義と企業社会』岩波書店。
- Machery, Pierre, 1991, “Towards a Natural History of Norms”, Timothy J. Armstrong ed., *Michel Foucault: Philosopher*, New York: Routledge.
- Melucci, Alberto, 1989, *Nomads of the Present*, London: Hutchinson. (=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民——新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。)
- 宮台真司, 1994, 『制服少女たちの選択』講談社。
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実』講談社。
- 中村美亜, 2005, 『心に性別はあるのか? ——性同一性障害のよりよい理解とケアのために』医療文化社。
- 野口裕二, 2005, 『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房。
- Peukert, K. J. Detlev, 1989, *Max Webers Diagnose der Moderne*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co. KG. (=1994, 雀部幸隆・小野清美訳『ウェーバー——近代への診断』名古屋大学出版会。)
- Rawls, John, 1993, *Political Liberalism*, New York: Columbia University Press.
- Ribeaux, Peter & Stephen E. Poppleton, 1978, *Psychology and Work*, London: Palgrave Macmillan.

- Rorty, Richard, 1989, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge: Cambridge University Press. (=2000, 齋藤純一・山岡龍一・大川正彦訳『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性』岩波書店.)
- Rose, Nikolas, 1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, 2nd ed., London: Free Association Books.
- , 2007, *The Politics of Life Itself*, Princeton: Princeton University Press.
- 斎藤環, 2003, 『心理学化する社会——なぜ、トラウマと癒しが求められるのか』PHP研究所.
- Senneett, Richard, 2006, *The Culture of the New Capitalism*, New Haven: Yale University Press. (=2008, 森田典正訳『不安な経済／漂流する個人——新しい資本主義の労働・消費文化』大月書店.)
- 鈴木謙介, 2007, 『ウェブ社会の思想——〈遍在する私〉をどう生きるか』日本放送出版協会.
- 田中美津, 1992, 『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リブ論』河出文庫.
- Weber, Max, 1919, *Wissenschaft als Beruf*. (=1980, 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫.)
- 矢原隆行・田代順編, 2008, 『ナラティブからコミュニケーションへ——リフレクティング・プロセスの実践』弘文堂.
- 山田陽子, 2007, 『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像』学文社.
- 山本祥弘・堀内進之介, 2008, 「統治の比較社会学——真・善・美の歴史的位相」『社会学論考』29 首都大学東京・都立大学社会学研究会.
- 山之内靖, 1982, 『現代社会の歴史的位相——疎外論の再構成を目指して』日本評論社.
- Young, Iris Marion, 1990, *Justice and the Politics of Difference*, Princeton: Princeton University Press.

(おおかわら まい・首都大学東京大学院博士後期課程

／現代位相研究所)

(ほりうち しんのすけ・首都大学東京大学院博士後期課程

／現代位相研究所)

**Governmentality theoretic approach to Self-activity:
Contemporary phase of “relation of self to self”**

OHKAWARA, Mai

Graduate School of Social Sciences, Tokyo Metropolitan
University

And also Modern Phase Research Laboratory in M.P.S.Inc.
ohkawara@modernphase.com

HORIUCHI, Shinnosuke

Graduate School of Social Sciences, Tokyo Metropolitan
University

And also Modern Phase Research Laboratory in M.P.S.Inc.
horiuchi@modernphase.com

By considering what motivates people to be active in the contemporary time which is a post welfare state era wherein politics has its foothold on a subjective world, this paper aims to assert what could be achieved by the said activeness of people.

Taking into account the contemporary condition of governmentality, the contemporary time started when awareness of the existence of repression in discussing the problems on justice on a social world horizon became prominent. This in turn led to the development of politics based on beauty on a subjective world of horizon.

As such, the freedom of choice gives the impression of restitution of subjectivity. However, while psychological technology is giving identity to the agenda setting powers, the possibility of the creation of the choices itself has been cut off from subjectivity.

From the discussion above, this paper would like to point out that setting meaningful political aims should not be focused in answering what the contemporary politics could do for us but instead, in how to put contemporary politics under a test.

This paper also points out that such endeavor should be asserted at the “nobility” horizon in relation to oneself and by considering such endeavor as “self denial”, I would like to point out one of its possibilities.

Keywords: ethico-politics, governmentality, self-denial,